

『日常』

伊藤佑弥

2011年04月16日16:04

「うすもぐく」

手首を切り落としてしまったら、血が出なくて、天国に行けば、世界が変わる気がしたのに、どうしようもなく、まあいいかという気分で来世を決めようとしたら……

って小説書いてる。

書き終わったら、手首落ちるかな。

落ちないだろうな。

手首のこと嫌いなのに、離れられない。うーん、まあいいや。切れないカッターだから100円均一で買ってきた。

これで落ちる手首に何の価値があるだろうか。

すこいっばいオナニー見て疲れた。するのには気持ちいいのに、見ると疲れるね。

だからって洋モノみたいに妖艶なBGMを流すのはなしだし、もちろん射精前にカウントダウンするのもあり得ない。コスプレを脱がすのはしようがない。邪魔だし。

邪魔なんだよね、コスプレの格好も、僕も。

世界に要らない性交にいらない。

邪魔になるの。ぼさぼさしているの。

だから脱がすし、いなくなる。邪魔って漢字は怖いね。生きるのも辛くなる。

つらいとわけではないし、ただ希望がないというわけでもない。

漠然と僕必要性がわからなくなっただけ。

みんな才能やセンスにまみれて、僕だけ何も無い。

ああって気付いたよ。

僕だけ何も無いんだよ。歩道橋の上でようやく気付いた。泣きそうになって蹲ったら、下から車の通る声が聞こえた。

おわりだって聞こえる。

僕は何もない。才能もセンスも。人を引き付ける華も。何もない。風景の一つだ。8年経っても

変わったことに気づかない。風景

そうそう。

2011年04月16日16:30

「あたまのなか」

ああ、あさ、ああああ、あああ、あ

ああああ、あああ、あががが、ああああま

しぬしぬしぬしぬしぬしぬし

だめだめだ、

みんなするのいし、なんでみんなこんなことができるの、ぼくできない、ぼくいらぬい、必要にもされたくないじゃあ100の愛が欲しいなんておもわないけど

誰も考えなかった者が勝つなんて、生きているなんて早さの問題じゃないはずなのに。

僕はじろしろう

僕はなにをしよう

なんもできないわけではない。

生きている。

2011年04月17日03:06

「かいたけど」

すげえつまんねえ日記ができたかった。

簡潔にもう少し面白く童貞チヨコレートの方には書いたがあれも失敗作。

僕は何がどうなっているのだろうか。またどこか知らないところにて、友だちに最低なことをしていないか不安だ。

でもまだ大丈夫な気がする。

3時になりました。

僕はまた起きています。

さようならが聞こえました。

今日をゆめようとしたのに今日は時間が過ぎて昨日になったのに、まだ今日をやめたいと思っ

ている。

不明瞭に才能あるとか言われたら不安になる。僕には何もないと思っ

うになる。でも時々そんな言葉がないともう一生やる気がなくなるのだから伊藤佑弥は面倒臭い。

自分じゃなければとくに見放している。

周りには才能やセンスの水を持った人たちがたくさんいて、僕も勘違いしてしまう。僕の水はた

だの水ですぐに溶けてしまう。なのにみんなの水は溶けず、持ち続けているので僕も持っているの

ではないかと勘違いする。

楽しい日記を書こうとしたのに書いたのは何でもない読みにくいだけの日記。

ずっと。

口内炎が痛む。

僕への問いが僕にはわからない。

書いても書いてもわからない。

教えて欲しいのにみんな自分で精一杯だ。僕はもう僕すら扱えなくなっている。

2011年04月18日07:58

「むむれなこ」

眠れないので死のうと決めたのに、そしたらすぐに眠ってしまった。鏡が見えない世界を映して

いる。僕が鏡を見ていない時に鏡はちゃんと姿を映しているのかわからないように、僕は宇宙を知

らない。そして夢中。

2011年04月17日08:59

「けしがる」

朝から日記を読んで衝撃。なんでみんなこんなに良い文章を書くんだ。僕なんてゴミみたい思える。吐きそう。

それは小田急線の白いが鼻の中で残っているからかもしれない。朝帰りとすれ違って、僕は電車に乗っては乗る前。今日はグミを食べたい。グミを買いたい。グミがあれば顔の筋肉が元通り。グミ食べたい。

そしてもう自慰をやめたい。

日曜だから駅のホームは人が少ない。みんな気づいてないけどエスカレーターが動いていた。停電はなんだったのだろうか。僕の台風時のような高揚はどこに行ったのだろうか。地震怖い。地震あるからって考えると外に出られない。こんなに弱い子だっけ。もう子じゃねえか。

電車に乗った。車内に女の子の笑い声から、一瞬間違えて専用車両に乗ってしまったのかと思っ

て、唾と思考を飲んでしまっ。

飲まれたのは抱かれない男になりたいなあという思考。

ああ日記がダメダ。

下から読んでもダメダ。

上から読んでもダメダ。

悲しく読んだら、

雨が降っていた、僕は彼女にフラれて職もなくなった。雨が僕を責めているのか横殴る雨が止まない。僕は何をしたのだろうか。何もなかったから、こんな目にあっているのか。ああ僕は呟いた。ダメダ。

過去の日記を消してしまいました。なんか重要な日記あったかな。でも思い付かないということは風が流れているのだろう。

電車の中吊りにあるような現実が僕には見えない。

僕はどこにあるのか。電車に流れているから知らない。

2011年04月18日00:14

「せつぼし」

誰かの何かになりたいとは思っけれど、それをたくさん言葉にはしたくない。でもそんなことしてたら僕はすぐにゆりかへ戻るか、墓場で運動会になる。アイウォンチューキラーチューンって言われたらどれだけ楽か。でも僕には捧げる処女も純情も情熱もない。

それでどうしたらいいと悩むのだからしょうがない。

油を飲めばみんなにすこいよと言われて、片手にサラダ油を持ってしまっ。サラダ油も油かなとも考える。チラリとみんなを見るけど誰も僕を見ていない。

雑音が消えた。今一瞬だけすこい静かになった。なのに誰も僕を見ていない。

どうすればいいのだろう。油を指に垂らす。それで変わるなんて思っていない。わかるとも思っていない。

ただ指が光に反射するようになった。光はまだ僕を照らしているようだ。

2011年04月18日00:35

「むくらまっ」

桜を掴まえたなら彼女ができるんだって聞いたから、舞う桜を探したけど、風でみんな高く飛んで行った。

女の子の距離を早で例えるが、触れることすらできなかった。風が強いのが春な気がした。

久々に飲んだ水道水は甘く感じた。

もしかしたら春が来たのかもしれない。

告白してきたあの子は彼氏ができたみたい。もう僕を見る時は過去を思い返すような表情だった。死んだわけではないのに歴史上の人物。

選ばれなかったから、紛らわせようとしてシャボン玉を吹けば毎日の風の強さで、人の心くらい容易く破裂してゆく。

みんなが幸せになれば僕はいいやと思っただけに手首を切り落として、ミギーと仲良くなる。

寂しさはうねる。渦巻きのように。風に舞う花びらのように一つ一つの風景から僕の目線の粒子を奪う。

そうして、喪失。過去は加工されていく。

もう僕は彼女の名前の書き方を忘れた。顔の感じも。

2011年04月18日08:23

「きんきょう」

肘がいたい。

手首に黒子ができた。みんな見に来て。黒子ができたから。

これから絶体絶命などに行きます。頭張らなければ行けません。帰りに健健一さんのCDを買おうと目論んでいるので、早く帰れたらなあと思っっていますが、思っている以上に絶体絶命らしいです。僕は大丈夫なのだろうか。不安です。

いやこの不安は違う。僕が今感じている不安は絶体絶命の現場への不安ではない。じゃあなんだ、この不安は！

僕はこんな風に小説が書けない。書けたらいいのにね。書けない。

噂を聞いた。

でもなんか取りそうな気がするんだよねあとも思っている。軽々しく。僕の言葉は軽い。海に浮くくらい。歯が浮くくらい。

そして

肘がいたい。

頭張らなければ。頭張らなければ。

肘が痛い。

昨日眠る直前、世界が、光が青かった。蛍光灯から反射するものが青く見えた。なんだったのだろう。

起きたら白かった。昨日はどろどろだったけど考えたけど、意識していないことを思い出すのは大変。なのでそのまま、イトを休ませてえなあと呟いた。

財布を忘れた。
取りに帰った。

自転車に乗った。久々だった。

イヤホンはもうちぎれそうで、線が見えている。

これが切れたら僕の願い事は叶いますか？キングカズ。

間いかけたが、中吊りのキングカズは何も言わない。それはミサンガだよ、って優しく言ってもくれない。

だから今日も僕は孤独だ。

「ボスターとも目が合わない。身体はどこかしらが痛い。生きてるのが辛い。治らない。

治ったらどうなるのだろう。ギター持ちちゃって、ベイビーと歌うかもしれない。それが花束を

持って、君に1000の言葉を用いて愛を囁くかもしれない。

だから僕は光のように光年分の孤独がある。ああ谷川さんが言いたかったことはこれか。

光は届いた時に孤独が終わり、なくなる。

孤独は大衆化することなのか。普通を目標することなのか。僕は普通だ。風景になることなのだろう。

電車に乗ってかわいいい人を見つけて一瞬で恋に落ちるのに、降りたらもう顔を思い出せない。それによく似ている。

そんな気がした。

たくさん忘れ物をしている気がしてしょうがない。

そうやって毎日。

2000年01月01日0030

「おびえている」

2000年問題に。

2011年04月30日1959

「けっこうした」

松山ケンイチが。

似てるね、と朝イチでペリカンがスポーツ新聞をくれた。

その時は長崎有のバラレルを読み返し、文章のうまさに勝てる気がしないと落ち込んでいた。

僕はペリカンに似てないよと言った。ペリカンは記事と僕を見比べてふんわり似ていると言った。

結果似ていないということになった。

脳みそが友だちを欲しいと言っている。

四本足でペタペタ歩く。夜になって周りが見えなくなってきた。それじゃあ人も見つけられない。

ペタペタ歩いて明るいところを探す。まるで虫みたいだ。

コンビニを見つけた
友だち欲しい。店
ジャンプを読んで
魚顔のOL。
ビールを買う人。
じつとお菓子を
みんな死んでいる
生きているのかし
あ、アイスクリー
アイスボックスの
「このアイス、毒
そのアイスを食べ

うそびよん。

友だち欲しいなあ
夜のコンクリートの
両手を上げて、走る。
あばばばばばばばば

2008年11月07日09
「はじめての」

初めての友達ができ
なければいけないので
です。いい奴です。い
何回も言い聞かせた

2011年04月22日00
「ごきやうだ」

誰かから手紙が来な
らす風は、まるで地震
よく見たら、何かが
すこいと思った。すこ
夜に咲く花のように、
君のことを考えて、
時間が過ぎるのだから
でも僕は何もできなく
いいこになりたくて

タンパリンの音が聞こえた方向を見ると、人だかり。ああ人気者がいる。僕は一人で、新宿駅で風景画になった。

地震が起きたのに、普通だという違和感がずっと取れない。

テレビと現実がくっつかない。不謹慎とか言葉集は蔓延してるのに、笑顔だ。ちよっと前まで募金をした学生を見なくなった。笑顔で募金をお願いしていた。もう見なくなった。学校が始まったのか。

僕は、ビルを見上げる。

電気がある。

泣いている声が聞こえたような気がして、その方向を見ても人が流れているだけだった。

ここに僕がいなくなったとしても、みんな知らないのだろう。

僕は現実という教科の授業をサボりすぎた。

ユーチューブは良い奴だ。どんな気分でも変わらない。

いいやつが多くて困る。

僕はいいやつじゃないからみんながいいやつだって気付いている。

でも僕がいいやつじゃないことをみんな知らない。いいやつのなら方もわからない。誰も教えてくれない。

学校教育め。

今将来を考えて、死にたくなった。

助けて。本当に。

今日は先輩と飲みに行った。

相変わらずの美人で小さかった。鎖骨の鎖骨の間にホクロがあったのを会って9年経つのに初めて知った。

2011年04月03日02:38

「あめのむす」

不安になる夜は黒が僕を押し潰そうとする。僕はそれに負けて、平らになって死にたくなる。

生き方一つとっても誰かと一緒にではないのに、誰かと一緒に選びたいと思いきなくて落ち込む。

生きていく意味なんてない。僕なんていらぬ。もう1万回は考えただろう。

でも答えなんかです、暗闇は闇になってまた朝が来ている。

僕は僕なんだと、実感するだけでも、喉に引っ掛かった骨のような温もりは取れないまま。きつと誰にも言えず、きつと誰も愛せず、僕は本音を隠して好かれようとしている。

きつと無理に笑ってるだけ。

きつと感情もなく謝っているだけ。

楽しいと思われたいから、しがみついてるだけ。

繋がりたいからじゃない。きつと思われたいから。こんなにつながるコミュニティが増えてくんだなあ。

僕は僕は少しだけ、普通から外れたくて、変とかすこいとか言われたいが言われたくもなくて、

他人とは違う風景のような人間になりたくなかった。
でも無理なのはわかってる。気づけば振り返れないほど時は経ってる。
僕は近いうちに死ぬだろう。楽しかった。来世で会いましょう。

僕は雨になる。

2011年04月30日22:19

「いまいま」

これは小説ではない。

2011年04月25日02:30

「だいもんだい」

僕は死んだほうがいい。新打法で。生きる活力もない。

乾燥のせいかわ喉が割れて血を吐いた。鉄の味がした。鉄なんて食べたことないのに。それはどことなく、恋愛を漫画や小説や映画の中でしか知らないのに恋愛を語る時に似ていた。

重量に負けて涙が落ちる。ほらね、まだ水が出ると、喉がカラカラなのに水は飲まず。さよならが別れの合図だなんて知らなかった。

そして何度僕は死ぬのだろう。

君に問う。

僕がいつの間にか宇宙人に殺されていて、宇宙人は僕の記憶や癖や容姿を全部コピーした。その僕を君は好きになるのか。

僕は僕であって僕ではない。

ちゃんと考えてくれた。

2011年04月27日00:06

「だいえつた」

55000キロ痩せたい。

太ったなあと思う同時に死にたいなあとも思う。
多分死なない。痩せたいと思う。

失恋した小説を読んで自分の失恋を繕った。重ね合わせて、落ち込んで、太ったなあと思いき、死にたいまで落ちた。

ただその小説の二人はヨリが戻ってしまった。僕は戻らなかった。そのまま別れた。苦勞人が夢を叶えたという事実を見てしまったように笑いが苦い。

それを思い出したからって死にたいと思うなんて、まだ彼女のことを好きだったのだろうか。小さい僕が僕を見上げる。

なんで？

と子どもっぽく言うが核心を突く。子どもは境界から消えた。僕が上を向いたから。空しかなかった。

多分好きなのだけれど、そこまで、毛布を捲るような感情を剥き出すくらいに好きではなかった。

死にたい

死のうか

楽になることしか考えていない

こんなつまらないことしか考えられない。僕がこの日記を読めば即マイミクを切る。彼女でもいたら楽しいのかもしれないと思っけれど、今日も彼女に会えずじまい。

朝起きたら死んでないかなってもう10年前から思っている。ずっと夢ならよいのに、夢なら僕は感情も色もないから、考えることがなくなる。

あーなんでもなく、
笑い方忘れた。

stoumar って歌った。

死んで瘦せたらいいのだと思っ。

2023年02月25日 08時42分 75:38

「まだついで」

まだ日記は続いている。僕はもう終わっているのに。

日常

<http://p.booklog.jp/book/40715>

著者：伊藤佑弥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cm-journey/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40715>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40715>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.